虚言少年　目次

ソノ一・三万メートル　005
ソノ二・たった一票　061
ソノ三・月にほえろ！　119
ソノ四・団結よせ　185
ソノ五・けんぽう　243
ソノ六・ひょっこりさん　305
ソノ七・屁の大事件　367

虚言少年

装丁　菊地信義

ソノ一・三万メートル

少年時代は楽しかったとか、少年の頃は輝いていたとか、少年少女達は純粋で無垢で夢に満ちているとか、そういうフレーズをよく耳にするのだ。少年時代は何ものにも替えがたい宝物であるとか、人生における掛け替えのない財産なんだとか、そんな言葉もよく聞くのである。

まあ、そうなんだろう。

ただ、僕には当て嵌まらない。いや、だからといって、決して恵まれない報われない辛く悲しく幸薄い少年時代を経験しているわけではない。

普通だ。

面白いし楽しいし、時には楽しくないし面白くないし、均せば普通だ。結局特別視するに値するようなものではないのである。で、それはその後だってずっとそうなんだろう。

多くの人はそんなもんだと思うのだが、どうなのだろうか。

幼児期は特殊だ、思春期は特別だという人もいるのだが、それは単に子供の頃は馬鹿だった、というだけのことではないのか。

子供はものを知らないのである。無知なのだから、まあ馬鹿なのだ。というよりも、自分がもの知らずだということを知らないのである。子供は。

もの知らずだと知り始める時分が思春期ということになるのだろうが、そのくらい育つと、それまで無知だったことを隠そうとしたり、もう馬鹿じゃないと無理に示そうとしたり、そういう恥ずかしいことをし始めるわけで、そこがまた馬鹿なのだ。よりいっそう馬鹿なのだ。思春期ほど恥ずかしくって馬鹿な時代はなかろう。そういう話なら、まあ同意出来るのだ。

そんなイタい時代を美化してどうするか。

いや、大人は馬鹿ではないとか偉いとか言いたいわけではない。

もの知らずのまま育ち切ってしまう人もいるし、どれだけ知識を得たって馬鹿は中々治らない。いや、まあ死んでも治らないものなのだろう。ただ、多くの人は長じる過程で自分が馬鹿だと知る。知って世間と折り合いをつける。それだけのことである。

大人も子供もそんなに違わない、ということである。

いや、違わないだろう。だから青春なんて言葉も括りも、僕にはわからない。

というか、青春なんて、ない。

誰に何と言われたってないのだから仕様がない。馬鹿を言うな、若い時分は誰だって青春なんだと言われたところで、納得はいかない。

青春というのはいつ始まっていつ終わるんだ。青春と青春以外はどう違うんだ。そんなものの切れ目はないし、変わり目も節目もないのである。それでもどうしたって青春はあるのだ、青春はスバラシイのだと押しつけるのであれば、齢喰った後だってずっと青春だろうと言いたい。中国の故事だかなんだか知らないけれど、そんなものに人生を仕切られたくはない。

いや、僕が取り分け捻くれているわけではないと思う。

青春時代を謳歌したなどと恥ずかしげもなく豪語する人はよほど厚顔無恥で傲岸不遜な生活を送っていたのだろうと思ってしまうし、青春時代こそ人生最良の時などと述懐する人は、その後どれだけしょぼしょぼの人生になってしまったのだろうかと慮ってしまうわけである。

まあ、人生なんてものは概ね一本調子でべたっとしたものなのじゃないだろうか。

いや、本当のところ。

その時その時場当たり的に良いとか悪いとか思いはするものの、実のところそんなに差はないのじゃないかと思う。人生山あり谷ありと謂うけれど、その高低差の比喩というのは、あくまで主観に対してなされるものだろう。

宇宙の果てから眺めれば、金持ちも貧乏人もない。まず人間は見えない。見えたって蟻んこみたいなもので区別なんかつかないだろう。

永い時間の中で測るなら、成功者も不成功者も大差はない。五十歩百歩どころか幸と不幸の差は0である。縦んば歴史に名を残したとしたって、その歴史自体いつまで残るかわかりやしないのだ。アフガニスタンの有名人を日本人はあまり知らないし、日本の著名人もウズベキスタンではただの人である。

そんなものなのだ。

不幸のどん底だとか幸福の絶頂だとかまあ色々なことを言うわけだけれど、それだって所詮は思い込みに過ぎないのである。

そもそもすべては気の持ち様でコロコロ変わるものなのだ。宝くじに高額当籤したって鬱の人は喜べないし、欲ッたかりは十円落としたって最悪の気分になるのだろうし。どん底宣言をした後に、もっとずっと悪くなることだってあるわけだし。

運勢だとか運気だとか、そんなものはもうオカルトの範疇である。まあそういうものを信じたほうが生き易いのかもしれないのだけれど、生き易いというのもまた思い込みに過ぎないのである。

飯喰って糞して寝て起きてさえいれば人間大概は生きているのだ。

生き易いも生きにくいもない。まあ、砂漠の真ん中で装備なしで独り暮らしせにゃならんとか、アラスカで裸で生活せにゃならんとか、そういう場合はたしかに生きにくいのかもしれないが、まあ戦争でもない限り、その気になればそれなりに生きては行けるものである。

そうは言っても、時に本当に生きて行くのが大変なケースというのもあるにはあるのだろう。大きな災害に遭ったりした場合は、ほんとに生きるか死ぬかというようなことになる。しかし、そうした過酷なケースを除外するなら——身の周りを見渡す限り相当数のタイヘンはただの贅沢だったりするのである。さもなければ大変だというポーズをとることで世間や自分を騙しているだけだ。

上には上があるように下には下があるわけで、隣の芝生は青かったりうちの子に限ってみたり、自慢したり卑下したり偉ぶったり下手に出たり見下したり見下されたり、そんなこんなで均してしまえば多くは同じようなもんなのである。

そのあたりのことだって、まあ大人も子供も変わりないのだ。

ただ、大人には責任だの何だのそうした付帯物が多いというだけのことである。

ま、そういう意味でのみ、大人は大変なのだ。飯を喰うためには稼がなきゃいかんのだし。くだらないプライドも即生活に影響してしまう。見栄を張ったお蔭で首を縊らなければならなくなったりもするのであるから、馬鹿は馬鹿なりに一応命懸けではあるだろう。社会と折り合いをつけるのが大変だというのは、まあよくわかる。

その点子供というのは、まあ多くは誰かに喰わせて貰っているわけで、育つのが仕事のようなものなのだから、くだらないプライドも発揮し易い立場ではある。取り敢えずピュアに馬鹿でいられる時期だと、そう言われるのならまあ同意出来るのだが。

美しき青春はないだろうよ。

もちろん、子供にも子供の社会というのはあって、それはそれで折り合いをつけるのが大変ではあるのだけれど、子供の社会は大人の社会よりずっと狭いわけだし、どれだけ歪つな形であろうとも、少なくとも子供が大人の庇護下にあることは間違いのないことで、よりみみっちい枠の中ですったもんだしているのが、まあ子供なのである。

愚かなのだからそれでいいのだ。というか、それより他に道はないのである。

その点のみを汲み上げるならば、子供時代は良い時代だ。でも、子供本人はその辺のことをわかっていなくもあるわけで。

無知だから知らないのである。

だから子供は、飯は喰えて当然だ、電気も水道も無料だと思っていたりする。いやそうでない子供も沢山いるのだが、最初から経済観念を持って生まれて来る子供などはやはりいないわけで、どのタイミングでそうした自覚を持つかは教育次第というより本人次第である。たとえ、もったいないもったいない節約節約という感心な心掛けを持った子供がいたとしたって、親が働いてくれなくっちゃ便所の水も流せないぜと、そんな風に思っちゃいないだろう。いいところ限られた資源がどうの地球環境がどうのというお題目を称える程度であって、親の時給と水道料金を天秤にかけて一日に使える水の量を決めるような子供には中々お目にかかれるものじゃない。

喰い扶持の心配がないから、本来的にどうでもいい些細なことが人生を左右する大事であると思い込んじゃったりもする。いやいや、本当にそれで命を絶ってしまうような悲劇だって起きるのだ。何もそんな些細なことで人生終わらせなくてもと大人は言うが、それは大人の理屈である。もの知らずの子供にとっては、世の中色々と大事ばかりだし、深刻なものなのである。キャパシティが小さいからちょっとしたことが物凄く重たくのしかかってきたりするものなのだ。

いや、中には子供らしく振る舞えない子供というのもいるわけで、例えば経済的に逼迫した家庭環境にあるような場合、そういう環境に置かれた子供はそれなりに苦労もすることになるわけだけれど、それは大人の苦労と変わりない質のものだろう。その場合は、子供の苦労というよりも、子供なのに大人と同じような苦労を背負わねばならなくなった苦労、なのだろう。他人よりも早く大人にならなければならなかったということだから、可哀想ではあるのだけれど。

そうやって育った苦労人は長じてから私に青春時代はなかった、などと宣うことが多いわけで、その辺から考えてみても、青春とは単に、愚かで無知で恥知らずな時期を指しているに違いないのだ。

青春とは馬鹿な時代なのだ。

そして、馬鹿は治らないのだ。

そうなら、ずっと青春でいいのだ。この理屈は間違っているだろうか。

美しくて輝いていて素晴らしくて瑞々しくて神々しい時代をして青春と呼ぶのなら、そんなものはない。いや、あると思いたい人もいるだろうし、あったと勘違いしている人もいるんだろうけれど、少なくとも僕にはないし、僕の知っている誰にもない。誰が何と言おうとないものはないのだからこりゃ仕様がない。

一方で、不細工で悶々としていて痛々しくてもの知らずでいい加減でしょんぼりするほど馬鹿な時代をして青春と呼ぶというのなら、それは僕にだってあったわけで、というかまだ充分現役なわけで、そりゃあ性別年齢に関係なく、中々終わるもんではないのである。体力が続かなくなってやや治まるとか、無理にでも治めないと暮らしていけないとか、そういう状況があるだけだ。

そんなものだと思う。

いずれにしても青春なんて枠組みはヒヨコの親子みたいなもんで、ありゃ可愛いかもしれないが、あり得ないもんなのだ。

そのうえ、人間はゴキブリみたいなもので、生まれた時からニワトリの形をしているのだ。ヒヨコ時代がそもそもない。

子供は、もの知らずでサイズの小さい大人なのである。キホンは同じなのだ。だから、少年時代というのは大人同様、小狡くて卑怯で臆病でヘタレなものなのである。

そんなものを人生の宝物と呼ぶかなあ。

宝というなら人生全部が宝だと思うのだが、それは違うのか。

生きているって素晴らしいというのであれば、その意見には大賛成である。

ちょっと待て、青春時代には恋愛だってするじゃあないか、少年は初恋をするじゃあないか、あの甘酸っぱい恋の味は齢喰ってからは味わえないぞなどと宣うなかれ。

恋なんかしない子供だっているのだ。

世人は多く、恋をしろ恋をしろと繰り返し謂う。いや、世の中は男女の睦みごとだけで成り立っているようなことを謂う。人間は必ず助平なんだと、もう決まりごとのように謂う。

そういう言説ばかりを耳にしていると、既婚者は軒並み浮気していて、若者はところ構わず発情していて、老いてなお薬品に頼ってまで異性を求め捲っているのが当たり前のような気になってしまうのだけれど、そんなことは断じてない。

そりゃ幻想である。錯覚である。

まあ、生涯サカり続ける色ボケ人生を送るような人だってまったくいないとは言わないけれども、それが人としてデフォルトの属性だと主張されて、ハイそうですかとは言えないのである。そういう人もいるかもね、くらいのものだ。

大体、いい齢をして性に振り回されて生きているような人間は、もう人としてどうかと正直思うのだ。また、そういう奴に限って、少年時代の淡い恋は美しかったなどとほざくわけだけれども、そりゃ育ってからよほど醜い恋愛をしたのだね、というだけの話なのだ。いや、肉体の関係だけしかないんだろうそういう奴の場合は。

そりゃもう恋じゃないだろう。

いやいやだからこそ青臭いプラトニックな恋がいいのじゃ、それこそが青春じゃと言うのかもしれない。でも、若い頃のほうが発情はしているのだ。齢喰ってからの変態染みた色狂いなんかより、ずっと健康的に発情しているわけである。恋の裏側に性がないとは言わせない。表側が欠落してしまって、性しかなくなってしまう困った勘違いオヤジは偶にいるのだけれども。そういうオヤジなんかが失くした表側を懐かしんで美化しちゃっているんだろうけども。

まあ、百歩譲ってプラトニックな恋こそを真の恋だとするのなら、それこそ若い者の専売じゃないということになる。

実際のところ、幾齢になったって恋はするのだ。その気になってしまったなら、それはそれでいいわけで、老人になってから甘酸っぱくなったって別に構いやしないのである。恋なんてもんは、取り分け若いうちにしておかなければいけないなんてもんではないのだ。

つまり若い頃の恋だからといって神聖視するのはおかしいと言いたいのである。大体、思春期の恋など、去勢の時期が少し遅かった猫のサカリのようなものなのだ。おたおた落ち着きなくなるだけでどうにもならない。どうにかなったらなったで色々とややこしくなるだけである。

恋の数だけ大人になるとか、失恋は人間を育てるとか、そんなことも断じてない。

これまたそういうこともあるかもね、程度のもんである。数をこなせば良いというようなものではないのだ。そもそも恋というのは風邪みたいなもんなのであって、ひいちゃうことはあるけれど、罹ろうと思って罹れるものじゃないのである。

だから恋知らずを不幸だと言うのは、やっぱりオカシイと思うのである。

恋なんてものは、しなければいけないものではない。したっていいけど、程度のものである。したくなきゃしなくたって構わないものなのだ。モテないモテないと気に病むこともない。普通はモテるんだみんなお盛んなんだ幻想が世に蔓延しているというだけで、そんなもんに惑わされることはないのである。古くは浮気は男の甲斐性だとか不倫は文化だとか、頭が蕩けたようなことを平気で言い放つ輩がいて、まあそんなもんかと思ってしまう人も世間には多いわけだけれども、そんな色ボケの自己弁護に耳を貸す必要は毛ほどもないのである。

放っておいてもなるようになるのだ。

焦ることもないし、逸ることもない。

ひたすらぼーっとしていたって大人にはなってしまうし、それでイカンということはないのだ。ただ平板に、同じ朝と同じ夜とを繰り返し、気がついたら大人になっていて、それでも立派に恋愛して立派な社会人になっちゃう人は、大勢いるのである。

恋愛よりもっとオモシロいことは世の中にいっぱいあるのだし。

いったいお前はさっきから何をぐじゃぐじゃ言ってるんだとお思いの方は殊の外多いだろう。僕だって何をぐじゃぐじゃ言っているのかわからないのだが、つまり僕は、このお話の主人公は、そういう子供なのである。

そう、僕は子供なのだ。

小学校六年生なのである。オイコラ六年生の語り口ではないぞと、大方の人はそう思っていることだろう。それは僕だってそう思う。でも、小学生の作文のようなものを読んで戴くわけにもいかないだろうから、ここんところはまあ堪えて戴きたい。

僕は、まあやる気のない、モテない、冴えない子供だ。かといって憤懣やるかたないわけでもなく鬱々と陰に籠っているわけでもなく、人気者でもなければイジメっ子でもなく嫌われ者でもなければイジメられっ子でもない。毎日がそこそこ楽しくて、そこそこ幸福であり、なのにそれを自覚していないことが多いので不平不満を垂れたりして、面白ければ笑うし悲しければ泣くし好きなことはやりたいし嫌いなことはやりたくなくて、学校も好きでも嫌いでもないという、まあべたっとしたどうでもいい子供なのである。

ただ、まあ特徴をひとつ挙げるなら。

僕は――嘘吐きなのだ。

5月某日（金）天気　晴れ

僕の名前は内本健吾という。

因みに、これは大人になった僕が、過ぎ去りし少年時代を回想している体裁の語りではない――ということを最初にお断りしておく。僕は、現役で子供だ。リアルタイムでリアルなガキである。思いっきり子供なのだが、子供は語彙が貧困だし思考回路も単純で、それでいてあちこち繋がりも悪いから、わかり易く大人語に翻訳されているのだ――と諒解して戴きたい。

さらに因みに、多少オヤジ臭い感じなのは、作者がオヤジだからではなく、僕がそもそもオヤジ臭い子供だからだ。

いや、実際オヤジ臭いのである。

まず、着るものに無頓着である。親が買い与えてくれたものを着る。と、いうか箪笥の上から順番に着る。時に、洗濯に出し忘れた前日の衣服が枕元に脱ぎ捨ててあったりすると、迷わずそれを着用したりもする。これは面倒だからに他ならない。

同じ服装で登校したってあんまり気がつかれはしない。

気がつかれてもギャグで済む。

それほどウケないのだけれども。

床屋にも行かない。これは頭髪伸ばし放題という意味ではない。髪は親が切る。経費節減家計倹約のためである。

この場合へアースタイルなどという横文字で語れるような様子にはならない。毛髪が、まあ刈られているというだけだ。坊主でないだけまだマシだというようなものである。幸いにも母親はそこそこ器用で、虎刈りにはならないから、別にいいのだ。

あ、因みにをひとつ言い忘れていた。

因みに、今は昔だ。

と――いっても、今昔物語集ではない。

このお話がいつ読まれるのか僕は知らないから、何年前と記すことは出来ないのだけれど、結構な昔である。いや、小学校がある以上、戦国時代や室町時代ではないわけであり、まあ明治でも大正でもない。だが平成でもない。それ以降ではもちろんない。

まあはっきり言えば昭和という時代の何処かではある。いや、レトロブームに乗っかったというわけではなく、僕にしてみればこれがまあ動かしがたい現在なわけだから、そこも勘弁して貰いたい。

即ち、携帯電話もないしタブレットPCもない時代だ。パソコンというのがまずない。ファミコンすらない。DSもPSPもWiiもXboxもない。

カードゲームもないが、ライダーカードはある。ライダーといっても、一号二号V3の頃である。知らない人は勉強して欲しいものである。後に定番化する特撮ヒーローやアニメの基礎は、まあこの時代、僕が今いる時代に確立したのだ。ウルトラマンだって魔女っ子だってもうあった。ウルトラマンの本放送は、実のところあんまり記憶にないのだが、夏休みの度に再放送なんかするものだから普通に観た気になっている。丁度、子供向けのテレビ情報誌的なものも出始めていて、まあ、情報だけは手に入ったから、実は全話観ていないウルトラQだって、ちゃんとデータは頭に入っているのである。

あ、僕は後にオタクと呼ばれる種類の人間であるらしい。ただ、まだオタクなどという言葉はなくて、当然そんなカテゴライズもない。でも、そういうニオイの連中はまあ既に生存していたのだ。

怪獣も好きだ。

でも、ロボットアニメには燃えない。

あ、この場合は燃え、でいいのだ。

萌えなんてものもまだなかった。後に萌えとして総括される感情の萌芽はみんなが持っていたのだけれど、取り分け特殊化されてはいなかったのだ。世が世なら、まあ僕は立派なオタクであろう。

とはいうものの僕は、六年生にもなるとさすがに大声でカイジューカイジューなんぞと言いにくいなあなどと思ってもいて、だからあんまりその辺の意思表示はしないのだ。

そういう分別はある。その分別が、本来あまり食指が動かないスポーツなんぞに己を駆り立てたりもするわけだが、まあそんなに長続きはしないのである。野球なんかはやれば面白いのだけれど、将来の夢は野球選手ですなんぞという、在り来りで無自覚で無謀な言葉は死んでも吐けない。

体形は、まあ小太りである。しかし小太りだという自覚はない。痩せてはいないというだけのことだ。まあガッチリしているという自己評価をしている。まあ、要するに依然幼児体形なのだ。

ただ、クラスにはデブキャラも何人かいるし、幸いその枠に僕は入っていない。だから、まあそれでいいのだ。

まあそんなだから。

女子にモテはしない。でもまあ、モテたいとは思わない。虚勢を張っているわけではなくて本当にどうでもいいのである。

オモシロいことは幾らでもある。女子にかまけている暇なんぞない。

ざっと観たところ——。

男子というのは、ざっくりモテる者とモテない者に大別されるんだろう。いや、まあそうだろう。

しかし。

僕の分析ではやや違う。

大別するとしたら、モテたい者とモテたくない者に分けたほうがいいと思う。

で。

まあモテたい奴というのは、モテようとして必死に努力をするわけである。

連中は金も時間も手間暇も、ありとあらゆる手段を惜しげなく使って己をアピールする。カッコもつければべんちゃらもする。そこは子供であるから、女子にモテたいというだけでなく、要は人気者になりたいというのに近いわけだが、ただ六年生にもなれば色気も涌いてくるから、まあターゲットは女子に向けられることが多い。

モテたい奴らの場合、その努力が報われることもあれば、まるまる裏目に出ることもある。まあ五分五分だろう。ただ、そういうマメな性格の連中は、飽きもしなけりゃ懲りもしないチャレンジャーが多いから、下手な鉄砲も数撃ちゃ中たる寸法で、まあ勝率は二割くらい上がるかもしれない。

二割程度上がったところでモテたい奴がみなモテるわけではない。というか、モテないからこそモテたいと願う次第であるのだから、モテてしまったらもうモテたい奴グループからは離脱しちゃうことになる。それが道理というものである。ところがどっこい、これが中々抜けられないのだ。

勝ち抜けが出来ない。

すぐに帰ってくる。

そして、モテたい活動を再開するのである。まあ、エンターティナーというのは大衆に向けられたものなのであって、ステディなもんじゃないのだろう。偶々中たったからといって君だけです的な切り返しをするのは難しいのだ。それまで相当数の弾丸を撃っているわけで。というか、中たった後も撃ち続ける性というか業があるのかもしれない。

ま、結局モテないんである。

でもって。

実際にモテる奴というのは、モテたくないグループの中にいることが多いのだ。

あ、この場合、ルックスというのはあんまり関係ない。まあ僕のような、明らかにどん臭い見た目無頓着のオタク型オヤジ系は別格としても、イケメンがモテるかといえば必ずしもそうではない。

子供なので、その辺がまだ出来上がっていないのだろう。その辺というのは、何というか、美的感覚というか観察力というか判定眼というか、そういう基準みたいなもんが結構ぐだぐだなのである。

クラス一カッコいい学校一素敵だと謳われているような野郎も、まあ冷静になって観てみれば——大概は、そうでもない。多少髪型がアイドルに似ているとか、ほんのちょっと大人びているとか、精々そんなもんなのである。

そういうのは、ちょっと育てば凡庸になっちゃうもんなのだ。

女子の評価も同じようなものだ。美少女なんぞそうそう棲息しているもんじゃないのだ。ストレートのロングヘアだというだけで、もう美人の仲間入りである。

というか、女子の場合多くは自己申告で決まるのだ。

私を見て構ってねえ可愛いでしょう光線を出してさえいれば、まあ大体そういう評価が下されてしまうのである。いや、同性の評価はともかくも、男子はといえば、はあそうですかそうなんですか的に容認してしまったりするものなのだ。立ち居振る舞いやファッションによって、結構な分量がカバーされちゃったりするからなのだろう。

とはいうものの、その自己申告と実物の間に埋められないほどの恐ろしいギャップがあるような場合は、別である。

まあ誇大広告というか看板に偽りありというか、あからさまな偽装表示の場合、多くは触れないでおこう的に扱われちゃうことになる。いや、これが食品や住宅ならあからさまな犯罪になってしまうわけだけれども、例えばどう見たって犬なのに猫ですと言い張られたりしちゃった場合、まあ取り敢えずそこんとこには触れないで遣り過ごしちゃいましょうかと腹芸を利かせた対処をするのが大人社会の暗黙のルールだったりするのだろうし、その辺はもう子供と雖もまるで大人と同じなのだ。君は自分が思っているほど美人じゃないよとか、そんな可愛い服は似合いませんよなどと説諭するアホはいない。

身のほど知らずは年齢に関わりなく何処にだってウヨウヨいるのである。

ただ、子供の場合は身のほども知らないが他のこともよく知らないから、ハードルがぐぐっと低くなる。低くなる上に暈けてしまう。だから、並みの身のほど知らずであれば飛び越せてしまったりするのであった。

そんなだから、ルックスというのはまあそれほど重要なもんではないのである。では何がポイントなのかといえば——そこは子供であるから単純なもので、一芸に秀でている奴がモテたりすることが多いのだ。

スポーツ万能だとかやたら絵が上手だとか、泳ぎだけは誰にも負けないとか努力した様子もないのに無茶苦茶成績が良いだとか、そういう奴は一目も二目も置かれるし、やっぱり女子にもモテるのである。

でも、そういう奴らは多く、スポーツしかしないとか四六時中絵を描いてるとか冬でも水から上がってこないとか隠れて勉強ばっかりしてるとか、そういう連中であるケースが多いわけで、即ちあんまり女子には興味がない連中だったりするのだ。タイムだとか仕上がりだとか成績だとか、そうしたものに興味が一点集中している。

異性に対する興味なんか、あったところで二の次だ。一点集中だから秀でるし、二の次だからモテるというのもあるだろう。

で。

モテたくないグループに属しているにも拘らず、別に何にも秀でていないどろーんとした連中——というのは、少なからずいるのだ。いや、思いの外多いのだ。

というよりも、それが普通の在り方なのじゃないかと僕は思うのだが。

観たところクラスの男子の六割はこれである。ま、その六割の中には、何らかの理由であからさまに嫌われている奴というのも含まれているのだが、そういうヒール的なキャラを除くなら、まあ要するに、どーでもいいと自他共に思い、思われている者ども——ということである。

映画でいうならギャラが弁当だけのエキストラ、マンガであれば輪郭ぐらいしか描かれないモブシーンの背景人物、小説に至ってはクラスのみんな的に表現されて一行も描写されない者ども——そういう連中である。

僕はもう、ど真ん中そこだ。

凡庸な一般の生徒達、とかだ。

主役を応援するクラスメイト達、とかだ。

被害者でも加害者でももちろん探偵でもなければ、死体を見つけて吃驚する人でさえなくて、事件発覚翌朝に黄色に黒字でKEEP OUTと書かれたテープの外側でぼけたらっと現場に残されたチョークの人型を眺めているだけの弥次馬である。シナリオにセリフはない。役名はおろか人数すら書かれていない、ト書きに群衆と記されているだけの人だ。背景なのだ。

描き分けもされずにぺたっとスクリーントーンを貼られてお終いなのだ。眼が描いてあればマシなほうなのだ。ガヤとか賑やかしとかその他大勢なのだ。

こいつらはモテない上にモテたくもないわけだから、まあ徹底的にモテない。しかしモテたくない以上、モテないから残念だとか悔しいとか、そんな風にも思いやしないのだ。

それでもそれなりに立派に生きているのだから、いいのだ。

いや、その枠内にいる自分を甘んじて受け入れているうちはそれでいいのだが。

背景から浮きたいとか、エキストラでも目立ちたいとか、群れから突出したいというのなら、笑かしキャラになるくらいしか道はないという連中である。

でも、苦労して技を磨き観衆を笑わせる工夫を凝らし、好機を逃さず衆人の注目を集められるような芸当が出来るほどに社交性や積極性があるのであれば——まあ最初からそんなグループに分類されたりはしないのであるが。

笑いの道も険しいのである。

ま、笑わせるのではなく笑われる程度のことはある。何かの契機で天然素材が発芽し開花することはあるのだ。ま、嘲笑失笑の類いである。これは、要するに小馬鹿にされるわけだから通常はムッとしたりガックリしたりするもんなのだろうが、偶然だろうが不本意だろうがウケたことに違いはない。

まあ、一度も注目されたことのないその他大勢の書割り達にとっては、ウケるというのは大変な栄誉でもあるわけで、傷ついて泣いたり怒って抗議したりしてもいいと思えるケースでも、悲しくなる前に嬉しくなってしまうのだろう。いやいや、本人もわかってはいるのだろう、その嬉しさの蔭には虚しさがあるんだということを。

でも、ウケるというのはそれなりに気持ちがいいもんなのだ。その一瞬が恰も麻薬のように効いてしまうのである。

書割りどもには。

だから、たまさかウケてしまったような場合、味を占めて狙ってみたりもするのである。と、いっても繰り返すだけなのだが。本当に麻薬のように常習性があるらしいのだ、ウケには。また、反復はギャグの基本だったりもするのであるが——。

ただ、繰り返すにしても、ギャグには間合いだのタイミングだのというしたたかな計算があるべきなのであって、これはぽっと出の素人には難易度が高い。加えて、そうした偶発的なウケには時流やら潮時というのがあるから、しつこくやるとハズす。

狙った天然がハズしてしまった時の寒さというのは、それはもう極寒だ。教室は絶対零度で薔薇も粉々である。凍土には何ひとつ実らない。まさに愚挙である。

調子に乗んな、ということである。

それは悲しい感じになっちゃうのであるが、ただ、明日は我が身と知りつつも、みんな同情なんかはしないから、冷笑したり酷評したりして貶めるのは概ね同じ芸ナシの同類どもなのだ。芸人は他人の芸を貶さない。しかし元々ガヤの書割りのその他大勢は、むしろ客としての属性のほうが強いので平気で突き落とすのである。

突き落とすというより、足を引っ張るなんだろうか。いや、同類の出世を嫉むような心持ちはないだろう。それほど興味はないと思う。

しかし、転落を予想してなお、ついやってしまうマヌケも多いのだ。そのチャンスを有効利用すればキャラを立たせるくらいのことは出来ると考えるのだろう。

いやいや、それを転機としてモテたいグループへの転身を図るようなマヌケも稀に出て来るわけだけれど、これはまるっきり考え違いなのだ。

最初に言った通り、モテたいグループの連中はモテないのである。モテないからこそ熾烈なモテたい活動を展開しているのであり、ぽっと出の、たいしてモテたい欲動が強くもない天然ボケの書割りがそんな叩き上げの芸人みたいな連中と競っても、勝ち目があるわけはないのである。いや、勝ったところでモテはせんのだ。

無駄なバトルである。

まあ、戦いというのはどんな社会においても無駄なのだ。闘争で壊れるものは多いが闘争から生まれるものはない。消耗するだけで、まるで建設的じゃない。

ただ——まあ、モテるかどうかは別として、キャラ立ちくらいさせておいても損はないとは、僕も思わないでもない。

そのくらいしかクラス内の立場を良くする術を持たないのである、モテたくないグループ所属の芸ナシ群という奴は。

例えば、背景の落書き待遇から出世して主役を喰い、やがてアニメ化までされてちゃんと動いて喋った『もーれつア太郎』のべしのような例だってある。ひたすら殺され続けた大部屋俳優が、あんまり何度も殺されるものだから逆に目立っちゃって監督の目に留まり、性格俳優に転身して成功しちゃった例だってあるのだ。原作マンガではその他大勢だったにも拘らず、アニメでめきめき注目され正式な名前が与えられないまま主役を張るまでの主要キャラに昇り詰めた『うる星やつら』のメガネだっているではないか。と――いうかそれはずっと先の話で、僕が生きている現在において高橋留美子さんはまだデビューさえしていないわけなのだが、そうだとしてもいずれそうしたことはある。

とは思うが。

まあ面倒臭いのだ。

大方の書割りには。

稀に、舞い上がることがあるだけだ。

稀なことだから、空気なんかまるで読めなくて撃墜されてしまうのである。チャーリー・ブラウンの揚げる凧のように、激しく地面に激突するのがオチなのだ。

ま、読むのが面倒臭い空気だってあるわけである。面倒臭いから六割の書割り組に甘んじているのであるし。

ほっといてくれ、なのだ。

と――。

大体において僕はこんなことをいつもいつも考えている。状況を分析したり他人を観察したりするのが大好きなのである。

でも、まあ口には出さない。

書割りだからだ。で、たとえ肚の中で何を思っていようとも、付和雷同で大勢に迎合するようにしている。左だなと思ってもみんなが右に行くのなら黙って従う。確証があったって左じゃないかなどとは提言したりはしない。言えば目立ってしまうからだ。そういうキャラじゃないのだ。リーダー的な奴に逆らうのも面倒だし、説得するのも面倒だ。説得出来てみんなが僕に従って、それで上手くコトが運んだとしても、良いことは何もない。そんなことで褒められたいとも思わない。

どうせ大したことじゃないのだ、常に。

子供なんだし。

だから僕は、間違っていたことが判明した後にホラ見ろオレは最初から違うと思ってたよ的な発言もしない。そういう後出しジャンケンみたいなことを言うキャラは別にいる。

悪役キャラだ。

僕は違う。書割りには書割りの役割があるわけで、それを黙々とこなすだけである。

ただ、肚の底で、

――やっぱ違うじゃねーか。

と、一人北叟笑むだけなのである。

ま、身に危険が及びそうな時だけは話が別だ。そういう時は――単独行動をする。

しかもうっかりを装って、だ。

初めから知っていた、予測していたとなると、僕は悪人になってしまう。
そう、『ポセイドン・アドベンチャー』という、大きな船がひっくり返っちゃうパニック映画があって――いや、これは何十年か後にリメイクされることになるわけだが、元になる映画はもうあったわけで、そっちも船はひっくり返るのだ。その逆さになった船の中で、生存者は船尾に向かったほうが助かる派と船首に向かうほうがいいんだ派に分かれる。
映画では主役による熱心な説得が試みられるのだが、話し合いは決裂する。主役は、というか主役の率いる集団は助かるのだが、一方の集団は死んじゃうのである。
僕が主役だったなら。
やっぱり熱い弁舌でもってみんなを説得するだろう。そっちは間違ってるぞ、死んじゃうぞと言い続けるだろう。
でも、僕は主役じゃないのだ。主役側のメンバーですらないのだ。主役達とすれ違うだけの、間違った方向に進んで死んじゃうだけの、名無しの中の一人なのだ。死んじゃう組のリーダーだというのであればまだしも、本当にぞろぞろ後ろについて行くだけの書割りなのである。そんな書割りが全体の動向を左右するような意見を述べたりするのは筋が違うと思うのである。というより、まず通らないのだそんな意見は。
それでも、僕は死にたかぁない。どう見たってギャラが高額（たか）そうなキャストについて行ったほうが生存率が高いことを、僕は承知しているのである。だからこっそり、というか、うっかりを装って、隊列を離脱し反対側に向かうというわけである。
それが僕の進む道なのだ。

ヒドイ奴――なのかもしれない。
というか、いくら僕でも生死に関わるような状況だったなら、もっとマジメにやるだろう。でも、子供社会であんまり命の遣り取りはないのだ。小学校の校内行事で大型客船が転覆したりすることはない。
概ね、駄菓子屋への近道は右か左かだとか、教頭先生が入っている便所は三番目か四番目かとか、そんなもんなんである。どっちでもいいことばっかりなのだ。
だから、まあ生き死にというよりは損得だし、怒られるか褒められるかとか、オモシロいかオモシロくないかとかいうのが判断基準なのだった。
あんまり褒められたいと思うことはないのだが、怒られるのは大嫌いだから、そういう時にうっかり黙って逃げるわけである。
僕は。
で。
問題は、オモシロさだ。
普通大抵一般的にモノゴトは上手く行ったほうがオモシロいと謂われる。まあそうだろう。でも、利害を無視し、効率を無視し、善悪を無視し、大局に立って眺めてみたらどうか。
失敗したほうが笑えるということはないだろうか。
いや。
ある。
大いにある。

ぐずぐずの計画が予想通りに大コケした時の爽快な喜び。綿密に練られた計画が僅かな綻びから瓦解してしまった時の痛快な悦び。不安に怯える危険な遊戯に興ずる連中が一蓮托生になった時の蠱惑的な欣び。絶対安全と高を括った連中が鼻を明かされた時の胸のすくような歓び。

失敗はヨロコビに満ちている。

だが、その喜びを得るためには、ある程度は堪えなければならないのである。他の者と同様に、上手く行くんだと思い込んでるようなフリをしなければいけない。決して最初から、どーせ上手く行くわけねーじゃん的な、シニカルな態度なんかを取ってはいかんのだ。

そういうクールな役どころの奴は、ことが頓挫した際に、ソレ見ろ言った通りじゃねーかと鬼の首を獲ったように嬉しがったりもするわけだけれど、そういう喜びとは質が違うもんなのである。オレがオレがという喜びじゃないのだ。

オレだけの喜びなのだ。

口に出しちゃあいかんのである。

そんなわけで、僕はまあ、たぶんきっと、嘘吐きなんだろう。

と。

お前は何をぐじゃぐじゃ言うてんねんと思う人も多いだろうが、まあ登校する過程でこのくらいのことは考えるだろう。

小学生と雖も。

まあこういう風に明文化することこそないけれど、いつだってこのようなことをぐじゃぐじゃ考えているのである。